

「ナンバ」考：歩き方にみる日本の特性

中 房 敏 朗

A study regarding Japanese old walking style of “Namba”

Toshiro Nakafusa

It is often said that before the Meiji era, Japanese walking form was of “Namba” style. “Namba” walking style is the movement of swinging left leg and left arm at the same time. There are some theories why Japanese walking form was “Namba” style. Most accepted theory for it is that Japanese had been agricultural people, therefore “Namba” walking style has its roots in the style of ploughing paddy field. In this research, however, there was no literary evidence which supported that Japanese were walking using the “Namba” style. In pictorial evidence many Japanese people, samurai and merchant and farmer, were using same walking style. Therefore pictorial evidence goes against the theory of “Namba” walking style being rooted in the style of ploughing paddy field.

Key words: walking style, Japanese culture, “Namba”

緒 言

フランスの文豪バルザックの言葉を信じるなら、人間の歩き方には「人の数ほど歩き方がある。」¹⁾しかしながら、それぞれの社会や民族にはある程度共通する歩き方の様式がみられることもまた、一面の真実であろう。モース²⁾やマイネル³⁾の指摘したように、人間の諸運動はたんに生物現象であるばかりではなく、文化や伝統といったものに規定される、すぐれて社会的・文化的な現象でもあるからだ。

たとえば、日本には「ナンバ」といわれる伝統的な身体動作がある。「ナンバ」とは、右足が前に出るときに右手も同時に前に出るような、上体と下体のひねりを生まない手足の動きのことである。明治以前の日本人の歩き方が、まさにこの「ナンバ」の動きであったとする主張は少なくない⁴⁾。とはいえ、古来の日本人が実際にいかなる歩き方をしていたのかは、歴史学的には確証を得ていない未解決の問題なのである。

この小論ではまず、ナンバの由来に関する諸説を検討し、ついで日本人が実際にいかなる歩き方をしていたのかを文書資料や絵画資料を手掛かりに検証していくことにしたい。なお本稿の対象とするのは、日常生活における歩き方であり、祭礼の際の行列や芸能の中の歩行については除外する⁵⁾。

「ナンバ」の由来

既述のように、上体と下体のひねりを生まない手足の動きを「ナンバ」という。「ナンバ」と呼ばれる所以は、何であろうか。

「ナンバ」とは大阪の難波のことではないかという民間起源説はさておき、「ナンバ」という言葉は、一般に「南蛮（ナンバン）」の下略であると考えられている⁶⁾。「南蛮」という語は、古代中国において、周囲の異民族に対する蔑称として使われた。日本の文献に「南蛮」が現れるのは、室町時代以降のこととされる。しかし、「南

蛭」という語がいつからくだんの意味をもつようになったのかは、どの辞書も明らかにしていない。少なくとも『日葡辞書』(1603年)では「ナンバン」という語に歩き方の容態に関する意味はない。明らかなことは、こんにち歌舞伎や踊りの世界で、右手右足と左手左足で歩く動きを「ナンバ(ン)」と呼ぶということである⁷⁾。

それでは、右手右足と左手左足で歩く動きがどうして「ナンバ」と命名されたのであろうか。一説によれば、南蛮人、すなわち日本に渡来した西欧人の動作に由来するのではないかという⁸⁾。あるいは、和船の網具につかう滑車を「南蛮」というので、半身になって滑車の綱をひく身ぶりもまた「ナンバ」というようになったという説もある⁹⁾。さらにまた、深田の泥の上を歩くためには「かんじき」のことを江戸時代の畿内方言で「ナンバ」といっていたので、この「ナンバ(=かんじき)」をはいて深田の泥の上を歩く姿もまた「ナンバ」と呼ぶようになったのではないかという見方もできる¹⁰⁾。いずれにしても、まだ確定的ではないようで、「ナンバ」の語源にはなお検討の余地が残されているといつてよい。

このように「ナンバ」という言葉の語源は、不明な点が残る。しかし「ナンバ」と呼ばれる身体動作の由来については、ある程度見解の一致をみている。それは農民の伝統的な労働形態に由来するという説である。

日本人の様ざまなしぐさを取り上げて、そこに日本文化の在り方を論じた労作に、多田道太郎の『しぐさの日本文化』がある¹¹⁾。そのなかで「すり足」について論じるさい、「ナンバ」の姿勢についても触れている。それによると、古来日本には「反閔」と呼ばれる聖なる足使いがあった。これが美化され、様式化され、日常化され、そして芸能や作法の基本形となったのが「すり足」であり、さらに日常の農耕生産にみられる「半身の姿勢」に世俗化していったものが「ナンバ」であったという。それらは、それぞれ大地をとどろかし、大地を愛撫し、大地を耕すさま

を表象しており、いずれも日本人の「大地への意識」が強く感じられると主張する。

いっぽう野村雅一¹²⁾の主張する考えによれば、「ナンバ」の由来は、ただたんに農民の労働時の半身の姿勢だけにとどまらないと考える。田や畑をしっかりと踏みつけて歩くという作業そのものが、すでに「ナンバ」に通じていたと主張する。彼によれば、日本には驚くほど多い種類の田下駄があり、これは歩くこと自体がまさに農作業に通じていたことを示すものにほかならない。日本の農民にとって、腰をかがめ、ひざを曲げて、大地を踏みしめて歩くことが、すなわち重要な農作業であったというのである。さらに野村は、和服という日本独特の服装が日本人の歩き方を強く制約していたと推論している。したがって「ナンバ」とは、日本の伝統的な農民の「はたらく身体」と、和服の着用という習慣とから不可避免的に生まれてきた身体技法であるというのである。

『身体の零度』という刺激的な著書をものした三浦雅士¹³⁾も、「ナンバ」の由来をやはり日本人が農耕民族であるという点に求めている。水田稲作において求められる動作は、大地に向かうものが多い。道具を使うとき身体に力をこめると、態勢が自然に「ナンバ」になる。また「ナンバ」の特徴は身構えに表れるだけではなく、しっかりとした腰の据えかたや「すり足」にも表れるとし、ひいてはゆっくりとした息づかい、息のつめかたにもつながるといふ。能の古典的芸の基本になる運歩も、まさにこのような身体技法でなされることに注意を促している。

このような見解を主張する三浦と対談した稲垣正浩¹⁴⁾もまた、「ナンバ」という動きの合理性を説く。急いで歩くのならべつであるが、悠然とゆったり歩くのであれば「ナンバ」の動きで歩いたとしても、無理なく歩けたであろうと指摘している。また、農民階級ばかりではなく、武士たちも「ナンバ」で歩いていたと示唆する。というのも、武士には走ってはならないという心得があったからであり、腕を強く振って体をひ

ねって歩く必要がそもそもなかったはずだと推察している。

このように「ナンバ」という身体動作の由来に関しては、農民の労働形態を起源とする説を主流として、諸説あることがわかるであろう。しかしながら、どの説も重要な問題を見逃している。日本人が古来「ナンバ」で歩いていたことを自明の事実であると考えている点だ。日本人が「ナンバ」で歩いていたことを示す歴史的な資料は、はたしてあるのだろうか。

外国人がみた日本人の歩き方

日本人の歩き方に言及した過去の資料は、ほとんど見いだせない。われわれはふつう日常的な慣習行動について自覚することが少ないからである。ましてそれを文章に詳らかに書き記すことは、さらに少ないであろう。しかしながら、そうした日常的な慣習行動も、異文化に属する者の目からみれば、注意がむけられる機会があるだろう。場合によっては文章に書き留められることさえあるかもしれない。したがってここでは、外国人の書いた日本訪問記といった類いの文書が、日本人の歩き方を確認するために有効な資料となる。

外国人による日本訪問記は、邦訳されているものだけでもかなりの量にのぼる。しかし、それでも日本人の歩き方について言及した資料となるとやはり少ない。

順番に確認していこう。まず、ポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・フロイスが書いたものであり、日付は1585年6月14日となっている。彼は31歳から65歳まで日本に滞在した。布教のかたわらで、日本に関する史書や報告書を書きつづけたが、なかでも興味深いのが、日本とヨーロッパの風習を比較した文書である。箇条書にして611項目あるなかで、歩き方について触れているものがたった1つある。

「われらにおいては、足を全部地につけて歩

く。日本では、足の中程までしかない履物をはき、足の先だけで歩く。」¹⁵⁾

ここに言う「われら」とは、漠然とヨーロッパ人全体を指していると考えていい。彼の見たところ、日本人の歩き方が少し奇妙にみえるのは、履物に原因があったようだ。同様に、日本人の歩き方が履物のせいで奇妙になると考えたべつの人物に、エドゥアルド・スエンソンというデンマーク生まれの軍人がいる（日本滞在期間は1866年から67年）。

「ところでこの靴〔わらじ〕は、軽くて快適なのは確かだが、その形は非実用的で、日本人が股を広げてよたよた歩くのはそのためである。この独特の歩き方はまた、足先を内へ向かわす。」¹⁶⁾

わらじで歩き方がこうも変わるとすれば、高下駄を履いて歩いたとすれば、もっと奇妙な歩き方になるであろう。プロイセンの海軍少将であったラインホルト・ヴェルナーは次のように述べている（日本滞在期間は1860年から62年）。

「天候が悪いとわらじの代わりに下駄をはく……。高下駄で歩くにはなかなか技巧が必要だ。なんとしても不安定なので、つねにバランスをとらねばならず、歩く姿はまことにグロテスクだ。」¹⁷⁾

履物にくわえ、日本人の歩きぶりが服装面でも強く制約されていたことが柳田国男や野村雅一によって指摘されているが、古くは幕末日本を訪れた上記のヴェルナーによって観察されている。

「和服は上体はかなりゆったりと着こなすことができるが、帯から下は身体にびたりと密着している。したがって歩行の自由が

妨げられ、美人もよろよろと歩を進めなくてはならぬ。」¹⁸⁾

明治に入ってから同様に、履物や衣服によって歩き方が異なってくることを指摘した英国女性がいる。1878年に来日したイサベラ・バードは、1880年に上梓した『日本奥地紀行』で次のように述べている。

「彼女〔馬子〕はしっかりとした足どりで進んだ。……このように見苦しい服装ながらしっかりと頑健な足どりをする方が、きついスカートとハイヒールのために文明社会の婦人たちが痛そうに足をひきずって歩くよりも、わたしは好きである。」¹⁹⁾

たいそうな親日家で大森貝塚を発見したアメリカ人として有名なE・S・モースも、『日本その日その日』(1917年)の中でやはり日本人の歩き方の特徴について指摘している(1877年以来、通算3回来日した)。

「男も女も子供も、歩調をそろえて歩くということを、決してしない。……我国では学校児童までが、歩調をそろえるのに、日本人は歩くのに全然律動が無いのは、特に目につく。」²⁰⁾

これまで見てきて明らかなように、日本人の歩き方が「ナンバ」であったことを裏づける資料は、まったくない。けれども、西欧人の目からみると、日本人の歩き方はどこかおかしかったらしい。資料的には数も少なく、しかも時代も江戸末期から明治初期にかたよっているとはいえ、日本人の歩き方が奇妙であると考えた外国人がいたこと自体は、否定できないだろう²¹⁾。ある者は「よたよた」といい、ある者は「よろよろ」といい、人によっては「グロテスク」とさえ言い切っている。あるいは「しっかりとした足どり」や「律動がない」という表記もみえる。けれども、なにが奇妙なのか、つまり日本人の歩き方のいったいどこがそんなに奇妙に見えたのかは、文書はなかなか詳らかに語ってくれない。運動形態の言語化には、しばしば困難がともなうからだ。なお、管見では、歩きかたをつぶさに観察した文書は、まだ他に知りえていない。そこで、つぎに「形」や「様相」を知るのに威力を発揮する、絵画資料を考察してゆくことにしたい。

絵画資料にみる日本人の歩き方

明治以前の絵画を通観すると、日本人がかつて自分たちの歩き方を「ナンバ」で表現することが驚くほど多かったことがわかる(図1)。場



図1 1600年代前半の江戸の様子を描いた「江戸図屏風(左隻)」国立歴史民俗博物館蔵(小澤弘・丸山伸彦編『図説江戸図屏風をよむ』河出書房新社、1993年、27ページ)



図2 「月次風俗図屏風」東京国立博物館蔵，室町時代，16世紀（徳川美術館編『美術に見る日本のスポーツ』徳川美術館，1994年，32ページ）

合によっては、走るときさえ「ナンバ」のままである（図2）。さらに指摘できるのは、歩くときも立位するときも、たいてい膝が曲がったまま（＝かりに「膝折り姿勢」と呼ぶ）であることだ。武士も商人も農民も、この点には変わらない。古来の日本人が「ナンバ」歩きであったと主張される根拠は、おおむねこうした絵画資料に依っている場合が多い。

しかしこれらの表現を鵜呑みにして、日本人の歩き方が「ナンバ」や「膝折り姿勢」であったという結論を導くことは、むろんできない。第一に、絵画資料は「事実」を客観的に描写しているとは限らないからだ。第二に、西洋式のリアリズムの入る前の日本の絵画には、人間の動作を表すときに、この人が何をしているのかを伝えやすくする表現上の約束事が非常にたくさんあったという指摘があるからだ²²⁾。そうする

と明治以前の絵画中にたとえ「ナンバ」歩きが多く存在したとしても、それは実際の日本人の歩き方の一般的傾向を示すものではなく、むしろそれが絵画表現上の記号であったことの逆証になるかもしれないのである。

このような絵画資料特有の難点を克服する一方途として、現在のところ次の比較法が有効ではないかとわたしは考えている。(1)日本人が日本人を描いた絵画、(2)日本人が外国人を描いた絵画、(3)外国人が日本人を描いた絵画、(4)外国人が外国人を描いた絵画、これら4種類の絵画を慎重に比較考察するという方法がそれである。

日本人は外国人の歩き方をどのように描写したのか。もし外国人を自国民と異なる表現で描いていれば、日本人の目からみて外国人の歩き方が異質にみえたことになる。同様に、外国人が日本人の歩き方を描いたなら、いったいどのように表現したのだろうか。もし自国民と違うように日本人の歩き方を描いていれば、やはり外国人と日本人の歩き方が異質にみえたことになる。このようにして、絵画資料の正確度の問題を少しずつクリアすることが可能になるのではないだろうか。

日本には「南蛮美術」という歴史的にも興味深い芸術作品群がある。西洋人や西洋の文化を主題にした日本人の筆による絵画や作品のことである。そのなかに南蛮船が入港する荷場の情景を描いた『南蛮人渡来図屏風（左半双）』がある。不思議なことに、作品の中には、明らかに「ナンバ」の動きの西洋人が登場する（図3）。そうすると、日本人は誰でもかまわず「ナンバ」に描いたことになり、ことさら自国民だけを「ナンバ」に描いたわけではないことになる。「ナンバ」というのはやはり歩く姿を抽象的に表す記号であったのだろうか。あるいは、当時の画家にとって、歩き方など注意をむける必要さえなかったということを暗示しているのだろうか。

ところが、朝鮮人通信使が訪れたさいの様

を描いた絵画は、きわめて注目すべき描写になっている。日本人と朝鮮人の歩き方が、明らかに異質なのである(図4)。日本人はみな、膝を曲げたままで、しかも「ナンバ」気味に歩いている。それに対して、朝鮮人はみな膝が伸びており、歩幅も幾分短いように思われる。いっぽう、朝鮮人が自民族の立位を描いた絵画でも、

やはり膝が伸びている(図5)。絵画資料だけからみると、一般に朝鮮人の立位は膝が伸びていたという仮説が提示できそうだ。ただし朝鮮人が日本人を描いた絵画資料は、いまのところ管見に入っていない。この段階では、日本人の姿勢についてはまだ結論を提示することができない。



図3 狩野内善作「南蛮人渡来図屏風(左半双)」神戸市立博物館蔵(松田毅一監修・東光博英『日本の南蛮文化』淡交社, 1993年, 31ページ)



図4 江戸中期以降の通信使の様子を描いた「朝鮮通信使行列絵巻」天理ギャラリー蔵(天理大学附属図書館編『天理ギャラリー第38回展: 朝鮮通信使と江戸時代の人びと』天理ギャラリー, 1988年, 38ページ)



図5 金弘道 (1745-1816 以降) 作「瓦屋」国立中央博物館蔵 (安輝濬『韓国の風俗画』近藤出版、1987年、口絵5)

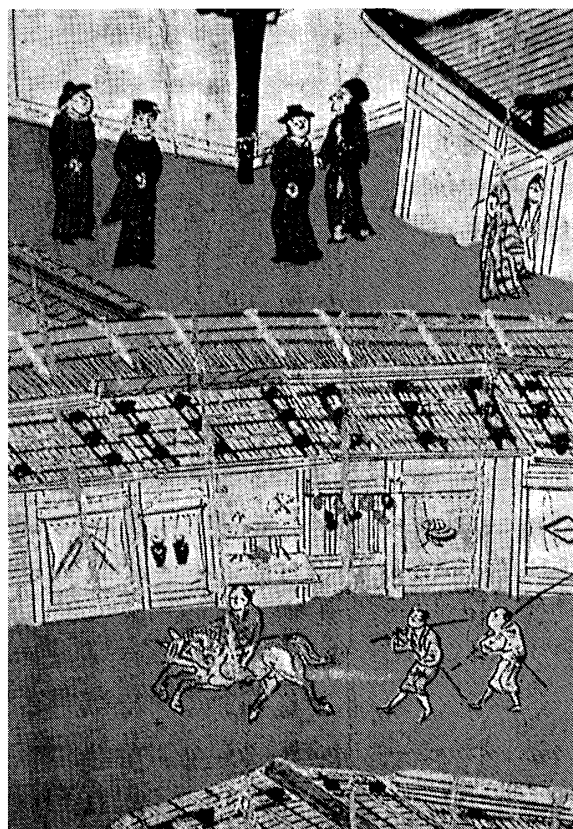


図6 「扇面京都南蛮寺図」神戸市立南蛮美術館蔵 (小学館『原色日本の美術 25 南蛮美術と洋風画』小学館、1970年、61ページ)

ところでまた、日本人と西洋人の歩き方を異質に描いている絵画もある(図6)。ここでもやはり日本人の膝の曲げ具合に比べて、西洋人の膝は明らかに伸びている。それゆえ、西洋人と比べても朝鮮人と比べても、日本人は膝を曲げ気味で立ったり歩いたりしていたという仮説が導かれる。このことは、かつて日本人は「歩くときも膝は曲げたままで腰をかがめていた」という野村の見解²³⁾と、ちょうど符合する。

ところが、洋画の影響を受けた画家は、ほぼ例外なく洋風の日本人の姿勢を描いているし、河野亮仙も指摘²⁴⁾するように江戸も末期になると浮世絵でも日本人の姿勢に変化がみられる。ということは、日本人が日本人を「ナンバ」や「膝折り姿勢」で描いたのは、やはり日本的な作風で描写する伝統的な表現上の約束事で

あったのだろうか。

暫定的結語

日本に現存する全ての資料をここで考察したわけではない。したがって現段階でいえるのは、きわめて暫定的な結論である。明治以前の日本人が「ナンバ」歩きであったという主張が繰り返されるが、それを裏づける文書資料が今のところないことを強調しておきたい。しかしながら、日本人の歩き方が奇妙であると考えた西洋人が実在したことは、確かである。いっぽう、過去の絵画資料を考察して言えることは、「ナンバ」や「膝折り姿勢」の日本人が驚くほど多いことである。ここには、武士も商人も農民も、ほとんど区別はない。しかし、多いが全てではな

い。なかには手と足を逆に動かしている例もある。また、洋画の影響を受けた司馬江漢のような画家は、日本人でも西欧人のようにすらっとした姿勢で描くことが多い。本稿では考察しなかったが、一つ気になる点が残る。彫刻である。仏像で「ナンバ」や「膝折り姿勢」のものを寡聞にして知らないが、聖人と俗人とでは姿勢も異なったというのがある。そうだとしたら、「ナンバ」の由来に関する考察には、労働形態という観点ばかりではなく、聖と俗との対比という観点も必要になるであろう。

ともあれ、明治以前の日本人が今日とは違う歩き方であったことは、おそらく間違いない。しかし当時の人間が「ナンバ」歩きであったかどうかは、まだ確証が得られたとはいえない段階なので、今後とも注意深く議論していくべきであろう。少なくとも、生業、階級、男女、等々といった社会的な差異を考慮する必要があり、一概に日本人は「ナンバ」で歩いていたという立論はやはり荒っぽいといわざるをえないように思われる。

註

- 1) バルザック「歩きかたの理論」(1833年), in; バルザック(山田登世子訳)『風俗のパトロジー』新評論, 1982年, 136ページ。
- 2) マルセル・モース(有地亨/山口俊夫訳)『社会学と人類学II』弘文堂, 1976年, 124ページ以下。
- 3) クルト・マイネル(金子明友訳)『スポーツ運動学』大修館書店, 1981年, 12ページ。なお川田は、人間の身体技法には、物理的法則に拘束される実用的側面と文化の約束に従う象徴的側面があると主張している(川田順造『西の風・南の風: 文明論の組みかえのために』河出書房新社, 1992年, 65ページ以下)。
- 4) 多田道太郎『多田道太郎著作集 III: しぐさの日本文化』筑摩書房, 1994年, 119ページ以下。野村雅一『しぐさの世界』NHK ブックス, 1983年, 14ページ。野村雅一『ボディランゲージを読む: 身ぶり空間の文化』平凡社, 1984年, 29ページ以下。野々宮徹「ヨーロッパ文化が日本のスポー

ツ文化に与えた影響: 走法や体操法にみられる例を中心として」in; 『シルクロード・奈良国際シンポジウム'95: 抄録集』2ページ以下など。

- 5) 祭礼の際の行列や芸能の中の歩行はしばしば様式化され、特別な流儀や約束事に従うことが多い。たとえば大名行列については、ケンペル(斎藤信訳)『江戸参府旅行日記』東洋文庫 303, 平凡社, 1977年, 52-3ページ。芸能の運足については、藤田洋編『歌舞伎ハンドブック』三省堂, 1994年, 32ページ。戸井田道三監修, 小林保治編『能楽ハンドブック』1993年, 246ページ。こうした歩行は本稿とは別の観点からの考察が必要であろう。
- 6) 新村出編『広辞苑』岩波書店, 第二版増訂版, 1976年, 1682ページ。日本大辞典刊行会編『日本語大辞典』小学館, 第8巻, 1975年, 391ページ。
- 7) 大槻文彦『大言海』新訂版, 富山房, 1956年, 1475ページ。『広辞苑』1682ページ。『日本語大辞典』第8巻, 392-3ページ。藤田洋編『歌舞伎ハンドブック』三省堂, 1994年, 31ページを参照。なお、歌舞伎用語としての「ナンバ」の項目を掲載している古語辞典は、管見では見当たらなかった。
- 8) 前田勇編『上方語源辞典』東京堂出版, 1965年に「南蛮人すなわち外国人の歩きぶりが日本人と違うという誤解からか」とあるという(『日本語大辞典』第8巻, 393ページ)。
- 9) 武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍, 1985年, 147ページに、ナンバという用具名が芸能用語に入ったのは、佐渡島歌舞伎の伝承によるのではないかと述べている。
- 10) 『諸国方言物類稱呼』巻四, 70ページ。阿部武彦氏の御教示による。
- 11) 多田『しぐさの日本文化』156ページ以下。
- 12) 野村『しぐさの世界』14ページ, 17-8ページ。野村『ボディランゲージを読む』29ページ以下。なお野村は近著で「ナンバはどうも世界に相当ひろく分布する姿勢であって、むしろ西洋人のように脚と腕を左右反対にうごかして、反動を利用しながら歩くというほうが特殊な歩き方として発達したのではないか」という問題提起をしている(野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学: 身体がしめす社会の記憶』中公新書, 1996年, 18ページ)。柳田国男も、衣装と歩き方の関連についてふれており、女性の内足は「多分二重に腰巻をして上の方が長く、且つ麻などのやうなさらりとした材料を使わなくなった結果」発明され

- たのではないかと述べている（『木綿以前の事』in; 『新編：柳田国男集』筑摩書房, 37 ページ）。
- 13) 三浦『身体の零度』126 ページ以下。
 - 14) 稲垣正浩・三浦雅士（対談）「大阪相撲と身体文化のポストモダン」in; OSAKA ソフト情報発信マガジン『季刊 SOFT』1996 年, 春号, no. 19, 33 ページ以下。なお, 武士の心得にも時代によって変遷があるということ, また腰にさした刀の音を鳴らすことを忌避したために走らなかったという点が大きいという二点を齋藤浩二氏からご教示を賜った。
 - 15) 松田毅一・E.ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』中公新書, 1983 年, 1986 年, 75 ページ。
 - 16) E.スエンソン(長島要一訳)『江戸幕末滞在記』新人物往来社, 1989 年, 79 ページ。
 - 17) R.グェルナー(金森誠也・安藤勉訳)『エルベ号艦長幕末記』新人物往来社, 1990 年, 73 ページ。
 - 18) 同上書, 80 ページ。
 - 19) イサベラ・バード(高梨健吉訳)『日本奥地紀行』東洋文庫 240, 平凡社, 1973 年, 95 ページ。
 - 20) E・S・モース(石川欣一訳)『日本その日その日: 3』東洋文庫 171, 平凡社, 1971 年, 218 ページ。
 - 21) 日本人の歩き方について記述している資料よりも, 歩き方について何も記述していない資料の方がはるかに多いという事実は, 意外に重要かもしれない。すなわち日本人の歩き方について気に留めなかった外国人の方が多数派であったかもしれないからである。あるいは, 日本人の歩き方が気にはなっていたけれども, 書く段階で省略されたということであろうか。
 - 22) 東京国立文化財研究所 編『人の〈かたち〉人の〈からだ〉: 東アジア美術の視座』平凡社, 1994 年, 180 ページ。古代ギリシアの絵壺に描かれたランナーが, 右手右足と左手左足をそろえて動かす「ナンバ」走りであったことはよく知られているが, 古代史家のガーディナーはそれを画家の表現上の問題に帰している (E・N・ガーディナー(岸野雄三訳)『ギリシアの運動競技』プレス ギムナスチカ, 1982 年, 157 ページ)。
 - 23) 野村『ボディランゲージを読む』30 ページ。
 - 24) 河野亮仙「舞踊と武術: アジアの身体文化」in; 野村雅一・鈴木道子編『身ぶりと音楽』東京書籍, 1990 年, 142 ページ。

(平成 8 年 7 月 15 日受付, 平成 8 年 8 月 12 日受理)